

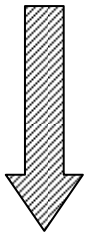
今号では、校区内の小学校と中学校が協力して児童生徒の社会性の育成に取り組み、実際にいじめや不登校(長期欠席者)を減少させることに成功した事例を紹介します。

《国立教育政策研究所生徒指導研究センター「いじめを減らす」(生徒指導支援資料3)より》

<A 中学校の実践>

■ 学校の状況

- ・この十数年間、いじめや不登校、暴力行為の件数が他の学校よりも多い。
- ・授業中に廊下に出て行ったり、先生に対して暴力を振るったりする生徒がいる。



■ 問題行動等を減らすための取組の方向性

- ・3年生が望ましい生徒集団を構築し、学校のリーダーとして活躍する場面を設定

社会性の育成

自己有用感の醸成

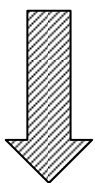
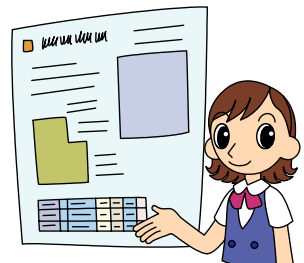
■ 具体の取組と成果(1)

○ 取組 [学年間交流の機会の充実]

- ・合唱コンクール、体育祭、学習発表会
- ・3年生が職業体験や奉仕活動などの体験を1、2年生に発表

◇ 成果

- ・依然として問題行動は多いものの、教師と生徒の関係は確実に改善



■ 取組を検証

- ・「中学校からの取組では遅すぎる！」と判断し、校区内のB、C小学校に学年間交流の取組を依頼

■ 具体の取組と成果(2)

○ 取組 [B、C小学校でも異年齢による交流活動を充実]

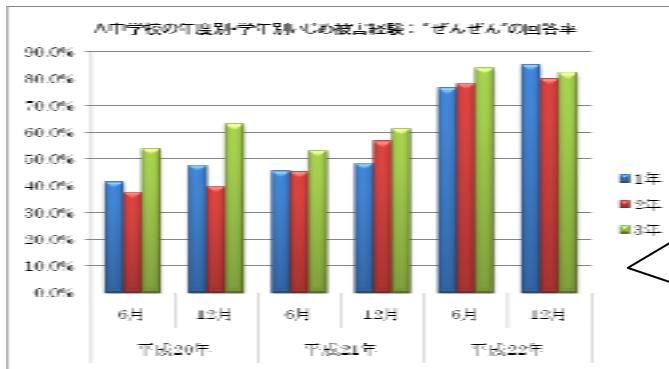
- ・6年生が1年生の給食の準備や片付けを手伝い
- ・縦割り班による清掃活動や集会活動の実施
- ・6年生が自らの擬似職場体験活動や宿泊研修の経験を下級生に発表

◇ 成果

- ・A中学校でのいじめが減少(特に、異年齢交流活動を実施してきた1年生) 被害経験なし(1年生) H20.6(41.6%) → H22.12(85.3%)
- ・他学年との関係をスムーズにする力の向上・維持



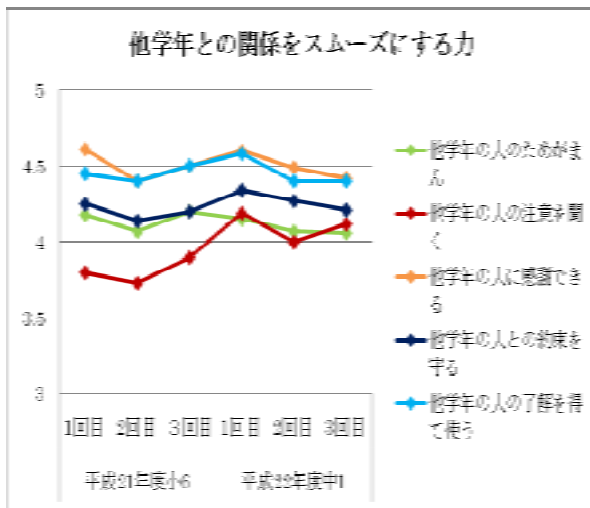
取組の成果を、次のグラフで詳しく見ていきましょう。



■ グラフの見方

左のグラフは、A 中学校においていじめの被害が「ぜんぜんなかった」と回答した割合を表したものです。数値が高いほどいじめの被害が少なく、反対に数値が低いほどいじめの被害が多いことを示しています。ただし、平成 21 年度までの調査と平成 22 年度の調査では、回答の選択肢が若干異なっているため、年度間の比較はできません。

中学校では、いじめの被害経験について、一般的に1年生は3年生より10～25%程度被害経験が多い傾向にあります。A 中学校においても、平成20、21年度の6月、12月の調査では、1年生は3年生より10～15%ほど被害経験が多くなっていますが、小学校6年生で異年齢交流を本格的に始めた子どもたちが中学校に入学した平成22年度では、1年生と3年生の差は、6月で7.4%にとどまり、12月では反対に1年生が3年生より被害経験が少なくなっています。



左のグラフは、平成22年度にA中学校に入学してきた生徒の「他の学年との関係をスムーズにする力」が小学校6年生の5月（第1回目）から中学校1年生3月（第3回目）までにどのように変化したかを表したものです。

一般的には、学年が進み、調査を重ねるごとに自己評価の割合が下がる傾向にあります。平成21年度の小学校6年生時において、「我慢する気持ち」、「感謝する気持ち」などの自己評価が向上または維持されており、このことは、この学年の異学年による交流活動の取組が奏功し、社会性を育成できたということが言えます。

さらに、この学年は、中学校1年生になってからもそれらの数値はそれほど下がっておらず、6年生の時に身に付けた資質（態度）が維持されているということが言えます。

■ 考察

意図的・計画的な「異年齢交流活動」により、「社会性の基礎」を育成することが可能

- ・他の人とうまくかかわりをもてたことを高く評価できる子どもが増え、併せて子どもの学校への適応感も高まる。
- ・子ども同士の多様なかかわり合いに加え、多くの先生から見守られ、支えられているという実感を持つことにより、望ましい人間関係を築くことができる。
- ・「他の人の役に立った」「他の人の役に立つことができる」という体験の積み重ねにより、子どもたちの「自己有用感」が定着していく。

■ 異年齢による交流活動を実施する際のポイント

- ・他者とのかかわり合いを楽しみと感じさせること
- ・上級生としての役割を自覚させたり、自信を持たせたりすること
- ・教育課程に適切に位置付けること

教職員がポイントを理解して、実施することが必要です。



「Ladder」は学校間の接続を図る「はしご」を意味しています。